

豪州最古の新聞

『シドニー・ガゼット』
本学図書館に所蔵

いまからちよūd二百年前の一八〇三年三月五日、南半球の英国植民地オーストラリアで初の新聞『シドニー・ガゼット・ニューサウスウェールズ・アドバタイザー』が創刊された。場所は二〇〇〇年オリンピックが開かれたシドニー。囚人ジョージ・ハウが植民地政府の命を受けて、印刷発行した。植民地人口は一万に満たない時代だった。両面刷り、四頁建てである。その『シドニー・ガゼット』が本学図書館に所蔵されている。むろん復刻版だが、後年タスマニアで創刊された『ホバート・タウン・ガゼット』もある。植民地初期の歴史を記録した貴重

な史資料であるが、そうした新聞が所蔵されていること自体、あまり知られていないのではなからうか。

筆者が同紙と遭遇したのはいまから四半世紀も前のこと。ニューサウスウェールズ州立図書館隣にあるデイクソン図書館だった。そこからオーストラリア植民地におけるジャーナリズムの生成過程をテーマに、約百年間の新聞史を追った。植民地政府から紙やインク、印刷機の支援を受けて現れた同紙が、たとえ「報道だけがわれわれの目的」（発刊の辞から）と述べても、のちに『政府ガゼット』が創刊されるまで、官報の役割を果たしたことは否めない。他方、有料の頒布、広告をとり、火事や裁判の記録、死亡記事、船舶情報、さらには読者からの通信を

載せている。そうした点、十分に近代新聞の要件を満たしていた。

発行者のハウは息子のロバートとともに、黎明期のオーストラリア・ジャーナリズムを築いた印刷人として知られる。実は織物店に押し入った罪で死刑宣告を受け、七年の流刑に減じられて、史上最大の刑務所に送られた男である。

植民地に独立新聞『ジョージ・オーストラリアン』が登場するのは一八二四年。植民地で生まれ、英国で教育を受けた者が検閲を受けずに創刊した。それが「自由なプレス」論争を植民地に巻き起こすことになる。

さて、日本ではどうであったろうか。

（上智大学通信 第二九二号 二〇〇三年六月一五日 号三頁掲載）